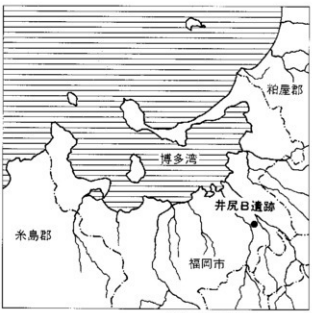
福岡市埋蔵文化財調査報告書第412集

I ZIRI

井尻B遺跡 3

—第4次調査報告—



遺跡調査番号　9335
遺跡略号　IZB－4

1995

福岡市教育委員会

序

古くから大陸文化受容の門戸として栄えてきた福岡市内には、多くの埋蔵文化財が分布しています。本市では、とくに文化財の保護・活用に努めてきています。

近年、道路の新設・拡幅、上下水道の整備など都市基盤整備が進み、都市化が東西南に進んでいます。本市では、これらの都市基盤整備事業や各種の開発事業によって失われる遺跡については、記録保存のための発掘調査を行なっています。

本書もそうした遺跡の一つで、南区井尻一丁目747－1の共同住宅建設に先だって発掘調査を実施しました井尻B遺跡第4次調査の報告書です。

調査においては、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居跡などからなる集落が検出されるとともに、貴重な遺物を得ることができました。

発掘調査から資料整理報告まで、費用負担をはじめ多くのご協力を賜わった長澤サトシ氏をはじめとする関係各位の協力に対し、心から感謝の意を表します。

最後に本書が文化財の理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　尾花　剛

例　言

1．本書は、南区井尻一丁目747－1の長澤サトシ氏による共同住宅建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が1993年9月から同年10月にかけて発掘調査を実施した井尻B遺跡第4次調査の報告書である。
2．本書使用の遺構実測図は、山口譲治、菅波正人、加藤隆也、林田憲三、山口朱美があたった。
3．本書使用の遺物実測図は、平川敬治があたった。
4．本書使用の写真は、遺構を山口譲治が、遺物を平川敬治があたった。
5．本書使用の図面の整図は、山口朱美があたった。
6．本書使用の方位は磁北である。
7．本書の執筆・編集は、山口譲治があたった。
8．本調査地出土遺物および本調査の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収蔵・保管し、公開していく。

本 文 目 次

Ⅰ 序説

1．はじめに …… 1

2．調査体制 …… 1

3．遺跡の位置と立地 …… 2

Ⅱ 調査の記録

1．調査概要 …… 3

2．竪穴住居址と出土遺物 …… 5

3．第7号井戸（SE－07）と出土遺物 …… 15

4．その他の遺構と出土遺物 …… 19

Ⅲ おわりに …… 22

挿 図 目 次

Fig. 1 井尻B遺跡第4次調査地位置図

Fig. 2 井尻B遺跡第4次調査地地形実測図 …… 2

Fig. 3 遺構配置実測図（SK－06実測図） …… 3

Fig. 4 第1～3号竪穴住居址（SC－01～03）実測図 …… 4

Fig. 5 第1号竪穴住居址出土土器実測図 …… 5

Fig. 6 第4号竪穴住居址（SC－04）実測図 …… 7

Fig. 7 第4号竪穴住居址出土遺物実測図 …… 8

Fig. 8 第8号竪穴住居址（SC－08）実測図 …… 8

Fig. 9 第8号竪穴住居址出土土器実測図 …… 9

Fig.10 第9号竪穴住居址（SC－09）実測図 …… 10

Fig.11 第9号竪穴住居址出土土器実測図 …… 10

Fig.12 第10号竪穴住居址（SC－10）実測図 …… 12

Fig.13 第10・11号竪穴住居址出土遺物実測図 …… 13

Fig.14 第13号竪穴住居址（SC－13）実測図 …… 14

Fig.15 第15号掘立柱建物出土遺物実測図 …… 14

Fig.16 第15号掘立柱建物（SB－15）実測図 …… 15

Fig.17 第7号井戸（SE－07）実測図 …… 15

Fig.18 第7号井戸出土土器実測図 …… 16

Fig.19　第７号井戸出土遺物実測図 …… 18
Fig.20　第６号土壙出土土器実測図 …… 19
Fig.21　各遺構出土遺物実測図 …… 20

図 版 目 次

Ph.1　調査区全景 …… 4
Ph.2　第１～４号竪穴住居址検出状況 …… 5
Ph.3　第１号竪穴住居址出土土器 …… 6
Ph.4　第４号竪穴住居址出土土器 …… 6
Ph.5　第４号竪穴住居址検出状況 …… 7
Ph.6　第８～10号竪穴住居址検出状況 …… 9
Ph.7　第９号竪穴住居址出土土器 …… 11
Ph.8　第10号竪穴住居址出土遺物 …… 11
Ph.9　第11・13号竪穴住居址検出状況 …… 12
Ph.10　第７号井戸出土土器 …… 17
Ph.11　第６号土壙出土遺物 …… 21
Ph.12　各遺構出土遺物 …… 21

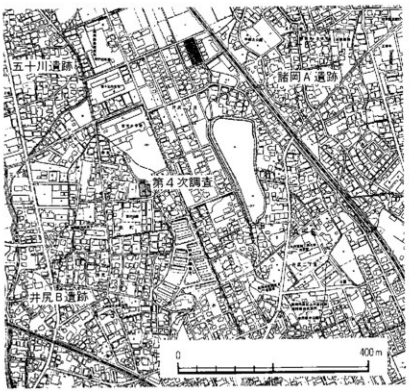


Fig.1　井尻Ｂ遺跡第４次調査地位置図

Ⅰ 序 説

1．はじめに

南区井尻一丁目の宮竹小学校南隣接地に、長澤サトシ氏によって共同住宅建設が計画された。この地周辺は井尻B遺跡の北東端に位置している。平成４年12月に、共同住宅建設の計画者である長澤サトシ氏より埋蔵文化財事前審査願が提出された（埋蔵文化財事前審査番号４－２－303）。福岡市教育委員会埋蔵文化財課（以下、埋文課とする）は、共同住宅建設計画地が井尻B遺跡内に入っていることから、遺構遺存状態を確認するため試掘調査を実施することを決定した。

平成５年３月11日に、建物建設予定地に南北方向の幅１ｍで14ｍ、５ｍ２本、東西方向で７ｍの４本の試掘溝を設定し、試掘調査を実施した。試掘調査の結果、対象地西側では現地表下1.２ｍ前後で鳥栖ロームとなり、遺構としては柱穴が確認され、弥生土器が出土した。一方、東側は白色の八女粘土層まで削平されていた。試掘調査の結果、共同住宅建設予定地の西側は弥生時代の集落が遺存している。東側も削平は受けているものの旧地形が東北方向に傾斜していると考えられ、深い遺構（井戸など）の遺存が予想されるとした。

埋文課は、試掘調査結果から共同住宅建設計画地全域に弥生時代の遺構が分布しているとして、計画変更していただき現状保存するか、記録保存のための発掘調査が必要であるとして、長澤サトシ氏と協議を行なった。その結果、RC造建物建設地のみ発掘調査実施と決定した。発掘調査決定を受け長澤サトシ氏と埋文課は、調査時期・調査費用・調査期間・出土遺物の扱いなどについての協議を重ね、合意事項を積みあげた。契約事項がととのい調査契約が成立した。

本調査は、調査事務所用プレハブなど条件整備完了後、弥生時代の様相把握を目的として、約1.5ヶ月間実施した。

遺跡調査番号	９３３５	遺跡略号	ＩＺＢ－４	分布地図番号	025－Ａ－３
調査地地籍	南区井尻 一丁目747－１			調査実施面積	３９０㎡
調査期間	１９９３年９月６日～１９９３年10月14日				

2．調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成した。緊急調査のため充分なる体制を組むことはできませんでしたが、調査委託者である長澤サトシ氏をはじめとする関係各位の協力のもとに発掘調査および資料整理・報告書作製作業は順調に進行いたしました。ご協力に謝意を表します。

調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課
　教育長　尾花剛　文化財部長　後藤直
　埋蔵文化財課長　折尾学
　第一係長　横山邦継　第二係長　山崎純男
調査担当　山口譲治　菅波正人
試掘調査担当　横山邦継（前主任文化財主事）　荒牧宏行
事務担当　吉田麻由美　西田結香
調査員・整理調査員　加藤隆也（現本市埋文課）　犬丸陽子　平川敬治　山口朱美
調査・整理協力者　尾崎君枝　品川伊津子　藤信子　藤本由香　星野明子

3．遺跡の位置と立地

福岡平野は、平野東部を北流する御笠川、平野中央部を北流する那珂川によって形成されている。両河川の中流域から上流にかけては多くの支流があり、各支流間には北へ延びる中・低丘陵が発達している。両河川の中流域で両河川は東西に離れていき、両河川間には那珂川町に源を発する諸岡川が北流している。諸岡川と那珂川間には南から北へ延びる標高50mから10mの洪積台地が所在している。

井尻B遺跡は、御笠川・那珂川中流域の諸岡川と那珂川に挟まれた須玖丘陵の先端部の標高12mから18m間に位置する先土器時代・弥生時代・古墳時代・古代の複合遺跡である。

本調査地は井尻B遺跡の北東部の標高12.6m前後に位置し、調査前は造成された更地となっていた。なお、本調査地は国土地理院発行の5万分の1地形図（福岡）の北から25cm、東から10.3cmの位置にあたる。

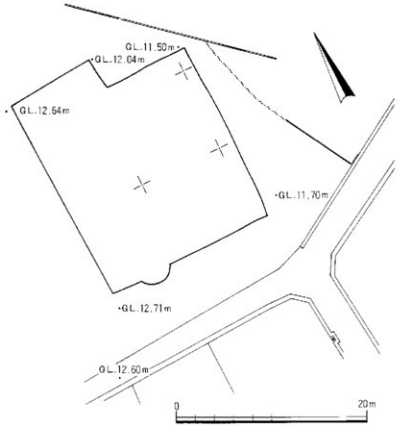


Fig. 2　井尻B遺跡第4次調査地地形実測図

Ⅱ　調査の記録

1．調査の概要

共同住宅建設予定地は、井尻B遺跡の東北端部の標高12.6m前後に位置している。この地は北側に宮竹小学校があり、南側は市道、東西は造成された民有地となっている。事前協議の過程で、発掘調査は建物建設地について実施することとなったため、建物建設地および北側の宮竹小学校との残地部分の遺構遺存状態が良好な部分を調査区として設定した。ただし、北側残地については宮竹小学校との間に1m強のブロック壁による擁壁があるため2m前後の引きを取り、北東側は削平を受けているため建物建設予定地を調査区とし、残地については調査対象としなかった。

調査は、西側で1.15m前後、東側で1.4～0.9mの客地層を除去することから始めた。その結果、西側では標高11.50mの鳥栖ローム検出面で、東側では標高10.53～10.62mの鳥栖ローム（下部）検出面で遺構を検出した。客地層を除去した結果、調査区の東側約3/5が大きく削平されていることがわかった。この削平は、地権者および近隣の方々の聞き取りから、宮竹小学校建築の造成の際行なわれたとのことである。

検出遺構としては、弥生時代中期後半の土壙2基（SK－05・06）、同時代後期後半から古墳時代初期にかけての竪穴住居址12基以上（SC－01～04・08～14等）、掘立柱建物1棟（SB－15）、土壙1基、柱穴多数がある。竪穴住居址は、SC－01～04と炉址のみからなる5基、SC－08～10の3基、SC－11・13・14の3基、SC－12の1基の切り合い関係のある4グループに分けることができる。竪穴住居址は30cm前後の遺存がSC－01・04の2基で、他は10cm以下の遺存であり、西側でも30～50cmの削平が行われていると考えられ、東側も削平がなければ調査区全域に竪穴住居址が分布していたといえよう。本調査区でもっとも古い遺構は調査区の南東部コーナーで検出したSK－06で、大きく削平を受けているにもかかわらず45cm前後遺存している。この土壙は検出面より床面が広く、貯蔵穴と考えられる。SK－05も同様の遺構と考えられ、台地東端部に貯蔵穴状土壙が分布する可能性があるといえよう。なお、東側削平部は井戸などの深い遺構の遺存が予想できた

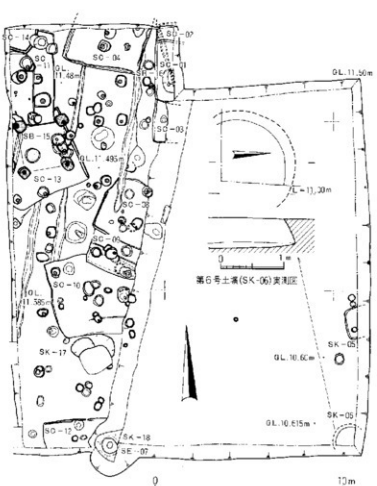


Fig.3　遺構配置実測図（SK－06実測図）

Ph. 1　調査区全景

ため建物建設予定地全域を確認したが、調査区の南側で井戸１基（SE－07）と前述の土壙２基が検出できたのみで、北側は遺構は検出できなかった。このことから、本遺跡が所在する洪積台地は、北東方向に延びていたといえよう。他の検出遺構として柱穴があるが、柱穴は柱痕跡をもつ掘立柱建物の柱穴と竪穴住居址のものがあり、建物としてまとめることができたのは１棟のみである（SB－15）。

検出遺構は、掘立柱建物をSB、竪穴住居址をSC、土壙をSK、井戸をSE、柱穴をSPと遺構記号を使用し、検出順に遺構記号の後に２桁の通し番号を付した（例　SC－01…SK－05…SE－07…SB－15）。なお、出土遺物は9335の遺跡番号の後に土器は00001から、その他は01001からの通し番号を付し登録番号とした。本書では遺構名と記号を併記し、遺物番号は４桁で記す。

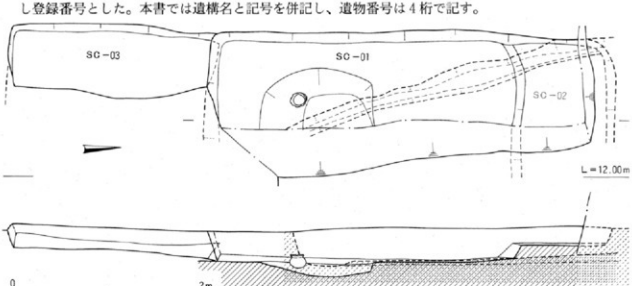


Fig. 4　第１～３号竪穴住居址（SC－01～03）実測図

2．竪穴住居址と出土遺物

1）第1号竪穴住居址（SC－01）（Fig.4・5，Ph.2・3）

本住居址は平面形方形の竪穴住居址で、調査区の北端部中央の標高11.48mで検出し、第2・3号住居址ともう1基の住居址を切り、東側の大半は削平を受け、一部調査区外に延びている。本住居址の覆土は黒褐色のしまりのない土で、南北幅4m弱、東西1m前後を確認した。1m弱のベットをもつと考えられることから、南北幅は4.3m前後となると考えられる。床面は平坦で叩きしめられ、壁はやや開き気味に立ち上がり、北側に10cm前後の高さのベットをもち、床に南北1．2m、深さ10cmの隅丸方形の土壙をもっている。土壙からは甕と器台の完形品各1点が出土した。また、覆土からは少量の土師器片が出土した。

出土遺物（Fig.5，Ph.3）：0001と0003は甕で、丸みをもつ胴から屈曲して開き口縁となっている。0001は口縁内外面はナデ調整、胴外面は指押さえが残り、下部にはハケ目調整がみられる。なお、胴内面は屈曲部下はヘラケズリが施され、底には指押さえがみられる。口径17.2cm、器高14.5cm。0004は口径28cmのボール状の鉢で、内面は横方向のヘラケズリが施されている。0002は口径13.7cm、器高17.3cm、底径16.6cmの器台である。

以上から、本住居址は平面形方形の竪穴住居址で、ベット、土壙の付設をもち、出土土器から古墳時代初期のものといえよう。

2）第2号竪穴住居址（SC－02）（Fig.4，Ph.2）

本住居址は平面形方形の竪穴住居址で、調査区北端部で第1号住居址完掘後検出した。第1号住居址に切られ、1基の住居址を切っている。調査区外で第4号住居址と切り合うと考えられるが、前後完形はわからない。壁溝までは40cm弱遺存し、黒褐色粘質土を覆土としているが出土遺物はない。本調査区出土遺物、第1号竪穴住居址に切られていることから、本住居址は弥生時代終末期のものか。

Ph.2　第1～4号竪穴住居址検出状況

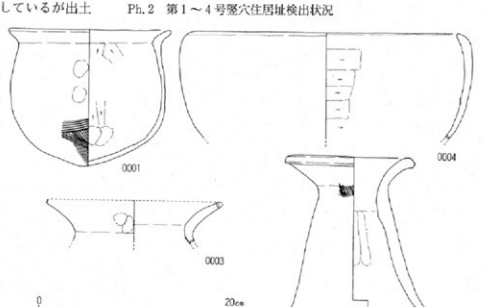
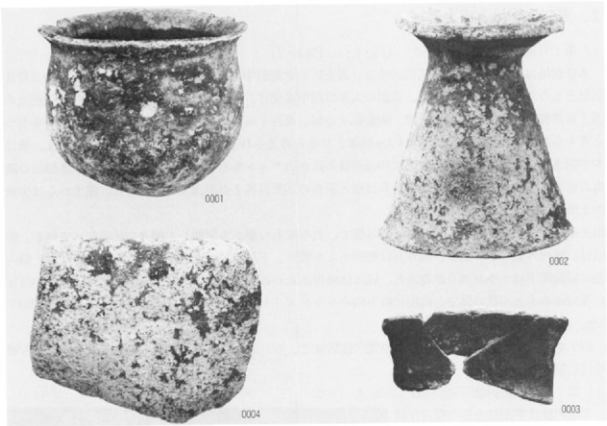


Fig.5　第1号竪穴住居址出土土器実測図



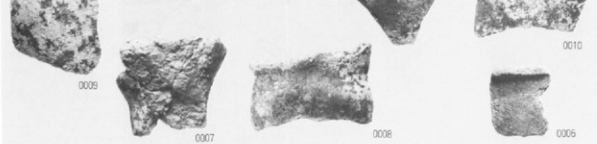
Ph. 3　第１号竪穴住居址出土土器

３）第３号竪穴住居址（SC－03）（Fig.4, Ph.2）

本住居址は平面形方形の竪穴住居址で、調査区北側中央部で検出し、第１号住居址に切られ、東側は削平を受けている。第２号住居址とも切り合い関係にあると考えられるが、前後関係は不明である。本住居址は暗褐色粘質土を覆土としているが、弥生土器の小片が出土しているのみである。南北方向2．2ｍ、東西0．8ｍを確認し、30cm弱遺存している。床面はほぼ平坦で叩きしめられ、壁はやや開き気味に立ち上がっている。本住居址は、出土土器片および第１号住居址との切り合い関係から弥生時代終末期前後のものといえよう。

４）第４号竪穴住居址（SC－04）（Fig.6・7, Ph.2・4・5）

本住居址は平面形方形の竪穴住居址で、調査区北側中央よりやや西側で検出した。住居址１基を切



Ph. 4　第４号竪穴住居址出土土器

り、柱穴59・60等に切られている。東西方向4.1m、南北2.5mを確認したが、北側は調査区外に延びている。幅20cm弱の壁溝が巡り、25cm前後遺存している。床および床上2cm前後の貼床面はほぼ平坦で叩きしめられており、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。なお、貼床面は赤色に焼けており、貼床上4cm前後の暗褐色土層中には多量の炭化材および焼土が混入していることから焼失住居といえよう。ちなみに、覆土は上から褐色・黒褐色粘質土・褐色土・褐色～黄褐色・暗褐色・黒褐色・暗褐色・黄褐色粘質土となっている。

出土遺物（Fig.7, Ph.4）：本住居址からは少量の遺物が出土した。0005～0009は甕で、0005は逆L字状口縁、0008・0009はやや丸みをもつ胴からゆるく開く口縁をもち、0006は短い端部がやや下がる平坦口縁をもっている。0008は胴内外面にハケ目調整がみられる。0005・0006の口径23.5cm、

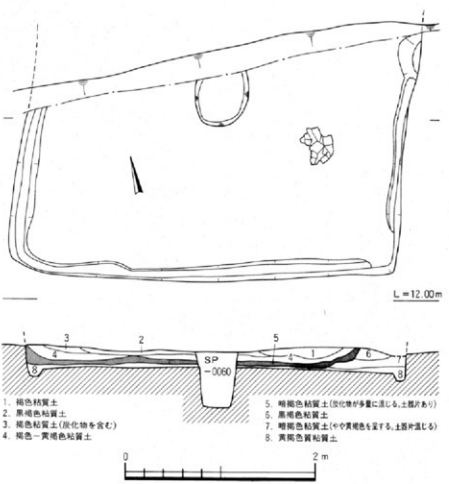


Fig.6　第4号竪穴住居址（SC－04）実測図

Ph.5　第4号竪穴住居址検出状況

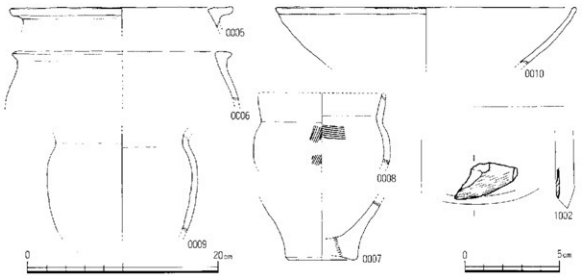


Fig. 7　第４号竪穴住居址出土遺物実測図

23cm。0007はやや上底の底部で底径7.6cm。0010は端部を丸く仕上げ口縁とした口径31.5cmの鉢で、外面は丹塗りである。1002は安山岩質凝灰岩製の石製穂摘具の破片である。

以上から、本住居址は平面形方形の貼床をもつ焼失の竪穴住居址で、出土遺物から弥生時代後期後半のものといえよう。

5）第８号竪穴住居址（SC－08）（Fig.8・9, Ph.6）

本住居址は平面形方形の竪穴住居址で、調査区中央部で検出した。第９号竪穴住居址、第67号柱穴を切り、第24号柱穴に切られ、東側は削平を受けている。本住居址は暗褐色土を覆土とし、南北方向3.2m、東西2.8mを確認し、10cm前後遺存している。本住居址東南部コーナーを中心に幅10cm前後の壁溝が遺存していることから、他辺はベットとなっていたか。第25号柱穴は本住居址の主柱穴と考えられるが、柱穴上面に0081～0083の甕・壺・高坏が敷き詰められており、住居廃棄の際、柱を抜き取り祭祀を行なったと考えられる。床面はほぼ平坦で叩きしめられている。

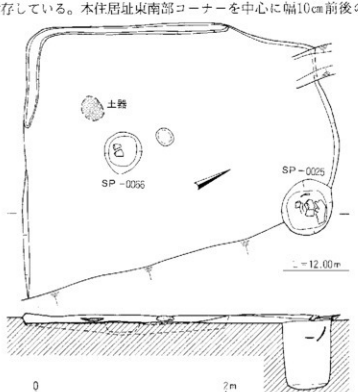


Fig. 8　第８号竪穴住居址（SC－08）実測図

出土遺物（Fig.9）：0011～0013・0016・0017・0081は甕で、0011・0012はくの字状口縁をもち、0013は逆L字状口縁をもち、0017は胴下半にコの字状の凸帯を巡らしている。0081の胴内外面にはハケ目調整が施されているが、他は器表が荒れて剥離しており調整はわからない。口径は0011が19.4cm、0012は20.2cm、0013は28.6cm、0016は41cmである。0014はボール状をなす鉢（台付

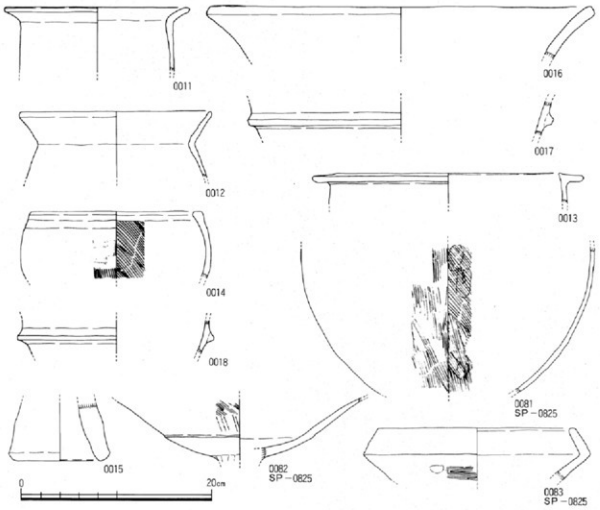
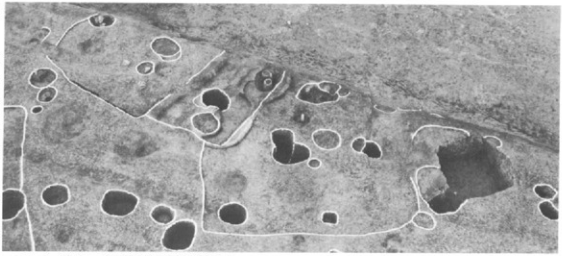


Fig. 9　第８号竪穴住居址出土土器実測図

か）で、口縁は横ナデ調整、胴内外面はハケ目調整が施されている。また、口縁から胴外面には丹の痕跡があり、丹塗りか。口径は18cmを測る。0083は複合口縁をもつ壺で、口縁は横ナデ調整が施され、頸移行部外面にハケ目調整痕がみられる。丹塗りで口径20.8cmを測る。0018も壺か。0082は高坏で、口縁、脚部を欠失し、器面は剥離し調整はわからない。0015は底径10.6cmの支脚である。

以上から、本住居址は平面形方形の竪穴住居址で、出土土器から弥生時代後期



Ph. 6　第８～10号竪穴住居址検出状況

後半から終末期のものといえよう。

6）第9号竪穴住居址（SC－09）（Fig.10・11, Ph.6・7）

本住居址は平面形方形の竪穴住居址で、調査区中央部で検出し、第8号住居址、第20・21号柱穴等に切られ、第10号住居址、第25号柱穴を切り、東側は削平を受けている。黒褐色粘質土を覆土とし、東西方向2.6m、南北1.8mを確認した。8cm前後遺存している。南辺に幅1m強のベットをもち、径50cm前後で深さ70cm弱の平面形隅丸方形の主柱穴を確認した。なお、ベット中央部は、長径2.8m、短径0.8m、深さ10cm弱の土壙を掘り、黒褐色粘質土に黄褐色粘質土を混合して貼り叩きしめている。ベット中央部に位置する第22号柱穴は貯蔵穴か。本住居址は遺存状態は悪いが、一辺4m前後の平面形方形の竪穴住居址で、南辺に幅1m強の一部貼りのベットをもち、2本の主柱穴からなると考えられる。

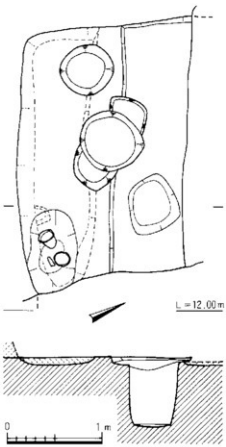


Fig.10 第9号竪穴住居址(SC 09)実測図

出土遺物（Fig.11, Ph.7）：0019・0020・0023は甕で、いずれもくの字状口縁をなしている。0019・0020は口縁端部が横ナデ調整、他はハケ目調整が施され、0020は指押さえ痕がみられる。口径は19.2cm、24.6cmである。0022・0023は長胴で、底部は丸底である。0022は口径16.7cm、器高20.2cmで、口縁は横ナデ調整、胴内外面はハケ目調整が施され、外面下半には指押さえ痕がみられる。0023は口径15.8cm、器高21cmを測り、口縁端部は横ナデ調整、胴外面上半は叩きが施され、口縁および胴外面下半、胴内面はハケ目調整で仕上げられている。0021は球状をなす胴から屈曲してやや開き気味に立ち上がる口縁をもつ壺か。口径18cm。

以上から、本住居址は一辺4m前後で、南辺にベットをもち2本の主柱穴からなる平面形方形の竪穴住居址で、出土土器から弥生時代後期後半から終末期のものといえる。なお、本住居址は遺存状態が悪かったため、第8号住居址を切っていた可能性が高い。

7）第10号竪穴住居址（SC－10）（Fig.12・13, Ph.6・8）

本住居址は平面形方形の竪穴住居址で、調査区の中央部から南西寄りで検出し、第9・12・23号柱

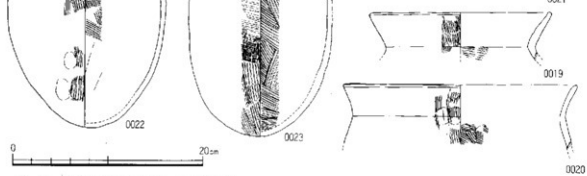


Fig.11 第9号竪穴住居出土土器実測図

穴を切り、第９号住居址、第14～16号柱穴等に切られ、東南コーナー部は削平を受けている。本住居址は暗褐色粘質土を覆土とし５㎝弱の遺存であるが、南北方向4.1ｍ、東西(4.5ｍ)を確認した。

Ph.7　第９号竪穴住居址出土土器

住居址中央よりやや南寄りに長軸60㎝、短軸50㎝を測り、深さ10㎝の皿状をなす炉を検出した。炉の床面は赤色に焼け、焼土が詰まっていた。この炉を挟む形で一辺40㎝前後、深さ50～60㎝の２本の主柱穴を検出した。床面はほぼ平坦で叩きしめられている。

出土遺物（Fig.13, Ph.8）：本住居址からは少量の遺物が出土した。0024・0026は甕で、0024は長胴でくの字状口縁をもつものの小片で、器面は剥離しており調整はわからない。0026は大形甕の胴下半部の破片で、２条のコの字状貼り付け凸帯を巡らしている。0025は口縁端を丸く仕上げた鉢（あるいは高坏）の小片で、口径29.6㎝。1008は糸魚川産出と考えられる翡翠製勾玉で、穿孔は表裏から行なわれている。長さ2.1㎝、幅1.3㎝、厚さ0.9㎝、重さ4.5ｇ。2001はガラス製丸玉で、紫色を呈し径0.7㎝、厚さ0.3㎝、紐通し孔径0.2㎝、重さ0.5ｇである。1003はスタンプ形の磨石で、敲打および磨つぶし用に使用したと考えられ、底面に敲打痕および回転磨耗痕がみられる。器長6.5㎝、幅5.5㎝、重さ275ｇ。

Ph.8　第10号竪穴住居址出土遺物

以上から、本住居址は中央に炉をもち、2本の主柱穴からなる平面形方形の竪穴住居址で、出土遺物から弥生時代後期後半のものといえよう。

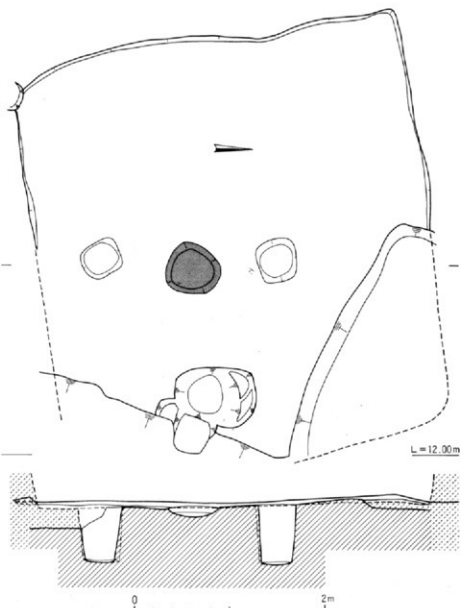


Fig. 12　第10号竪穴住居址（SC－10）実測図

8）第11号竪穴住居址（SC－11）（Fig.13, Ph.9）

本住居址は平面形方形の竪穴住居址で、調査区北西部で検出し、第13号住居址を切り、第14号住居址、第46～53・55～57号柱穴に切られている。本住居址の覆土は暗褐色粘質土で、南北方向5m、東西2.3m前後を確認し、15cm前後遺存している。東辺から北辺にかけて1m～1.2m幅で床から5cmの高さをもつL字状をなすベットが造り出されている。床面はほぼ平坦で叩きしめられており、ベット上は一部黄褐色粘質土を貼り叩きしめられている。壁は床からほぼ垂直に立ち上がっている。

出土遺物（Fig.13）：本住居址からは、甕の胴片など少量の土器と石器1点、自然石1点が出土した。土器片はいずれも剥離して器面が荒れており、図化できなかった。1005は安山岩円礫に敲打および研磨を

Ph. 9 第11・13号竪穴住居址検出状況

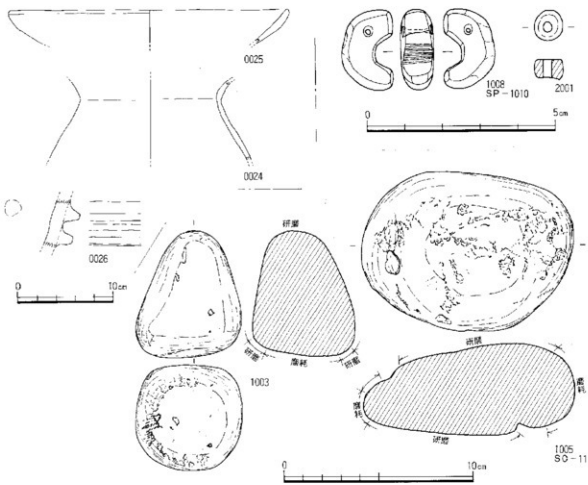


Fig.13　第10・11号竪穴住居址出土遺物実測図

加え楕円形に整形し、縁辺に使用による磨耗痕がみられる。長軸11.3cm、短軸8.2cm、最大厚4.7cm。

以上から、本住居址は平面形方形で1字状のベットをもつ竪穴住居址で、弥生時代終末期前後のものか。

9）第12号竪穴住居址（SC－12）

本住居址は平面形方形の竪穴住居址で、調査区西南部で検出した。第7号井戸、第5号柱穴と切り合い関係にあるが、前後関係はわからない。覆土はほとんどなく、北辺の壁溝と西側の辺を痕跡的に確認したのみで、東西方向3.4m、南北1.3mを測り、東側は削平を受け、南側は調査区外へ延びている。出土土器もなく切り合い関係も不明であるが、本調査地出土遺物から、弥生時代終末期前後のものであろう。

10）第13号竪穴住居址（SC－13）（Fig.14, Ph.9）

本住居址は平面形方形の竪穴住居址で、調査区の北西部で検出した。第11号住居址、第15号掘立柱建物、第30～32・37号柱穴等に切られ、北西部コーナーは調査区外に位置している。覆土はほとんどないが、黄褐色粘質土混じりの暗褐色粘質土が鳥栖ローム面に貼り付いた状態で、東西方向4.5m、南北4.2mを確認した。床面はほぼ平坦で叩きしめられており、東辺から北辺にかけて幅12cm、深さ5cm強の壁溝がある。炉は本住居址のほぼ中央部で確認し、径70～80cmを測り、8cm遺存している。炉壁は赤褐色に焼け、焼土が詰まっていた。炉を挟む形で2本の主柱穴を検出した。東側は柱穴は第31・32号柱穴に切られているが、径60cmを測る平面形隅丸方形で20cm強遺存している。西側柱穴は調

査区外に延びているが、径50cm前後の隅丸方形で40cm遺存している。本住居址では遺物の出土はなかった。

以上から、本住居址は中央に炉をもち、2本の主柱穴からなる平面形方形の竪穴住居址で、床面には貼床があったと考えられるが、削平を受けている。また、南辺から北辺にかけては壁溝がみられないことから貼ベットがあったと考えられる。本住居址は出土遺物はないが、第15号掘立柱建物などとの切り合い関係から弥生時代後期後半前後のものか。

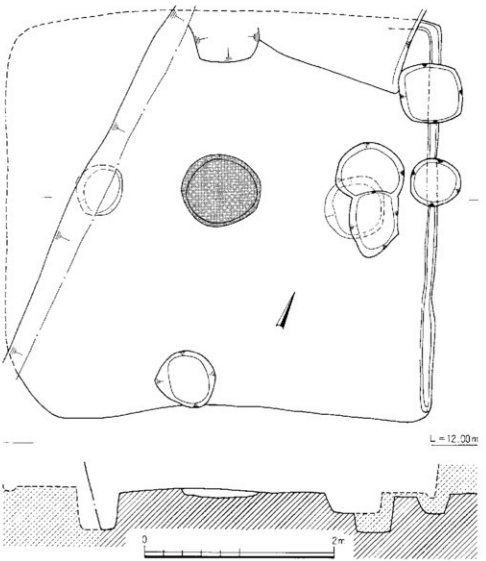


Fig. 14　第13号竪穴住居址（SC－13）実測図

11）第15号掘立柱建物（SB－15）（Fig.15・16, Ph.12）

本建物は第1533・1535・1545・1552号柱穴の4本の柱からなる1×1間の掘立柱建物で、調査区の西北部で検出した。第11・13号住居址を切っている。いずれも黒褐色・暗褐色・褐色の粘質土を覆土とし、径60cm前後の平面形隅丸方形の掘り方をもち、柱痕跡から径20～30cmの丸柱を用いたと考えら

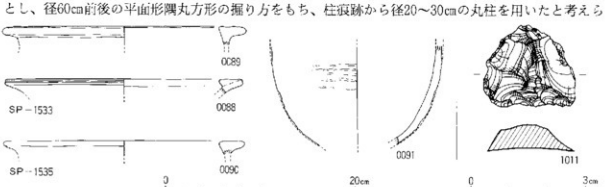


Fig. 15　第15号掘立柱建物出土遺物実測図

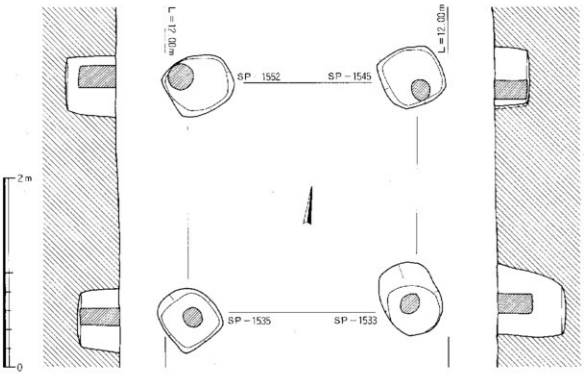
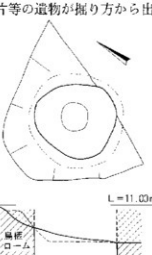


Fig.16　第15号掘立柱建物（SB－15）実測図

れる。40～70cm遺存している。第1545－1533－1535－1552－1545号の柱中心間は2.25m、2.30m、2.50m、2.54mで、平均2.4mである。

出土遺物（Fig.15）：本建物の4本の柱穴からは、それぞれ少量の土器片等の遺物が掘り方から出土した。いずれも細片であり建物の時期を示すものはないが、第1533・1535号柱穴出土遺物を図化した。0089～0091は甕で、前者2点は逆L字状口縁をもち、口径は25.6cm、25.4cmを測る。0091は胴外面にタタキが施されている。0088は鋤先状口縁をもつ壺で、口径25cmを測る。1011は気泡の多い黒曜石の残核を素材として、打製石鏃の製作を試みているが失敗し、廃棄している。



以上から、本建物は1×1間の掘立柱建物で、0091が第1535号柱穴の掘り方から出土していることなどから、弥生時代終末期から古墳時代初期の頃倉庫として使用されたものか。

3．第7号井戸（SE－07）と出土遺物（Fig.17～19, Ph.10）

本井戸は、調査区南西で検出した。土壙1基を切り、第12号住居址とも切り合い関係にあると考えられるが、削平を受けているため前後関係はわからない。検出面では径80～90cmを測り、鳥栖ローム・八女粘土層を掘り抜き、標高8.91mの含水層である砂礫層に達している。1.7m強遺存している。湧水があるため鳥栖ロームと八女粘土層の境界では通常だと大きく崩落がみられ径が広がるが、本井戸は最大径は1mとここにあるものの崩落が少ない。短期間の使用

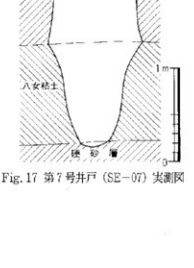


Fig.17 第7号井戸（SE－07）実測図

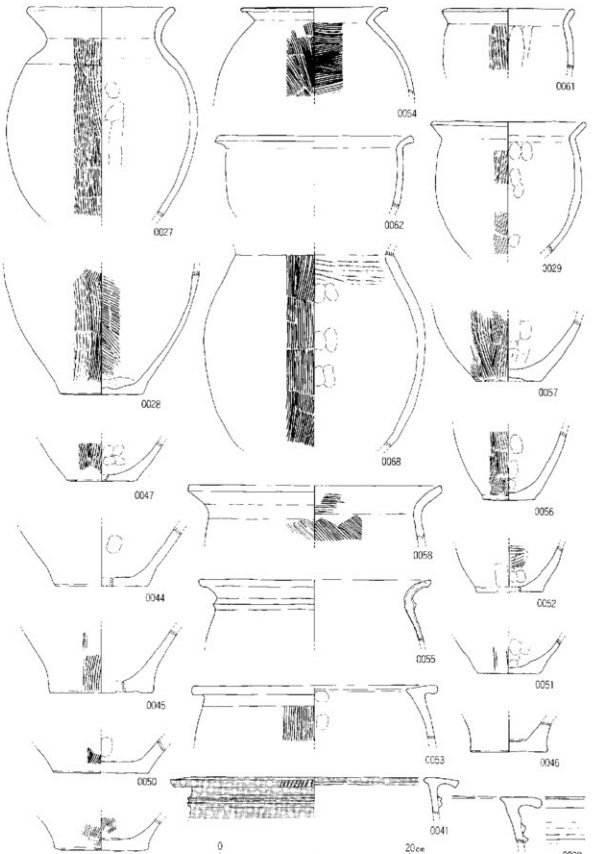
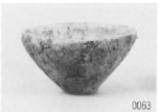


Fig. 18　第7号井戸出土土器実測図


0063

0064

0030

0054

0029

0028

0065

0027

0031

Ph. 10　第7号井戸出土土器

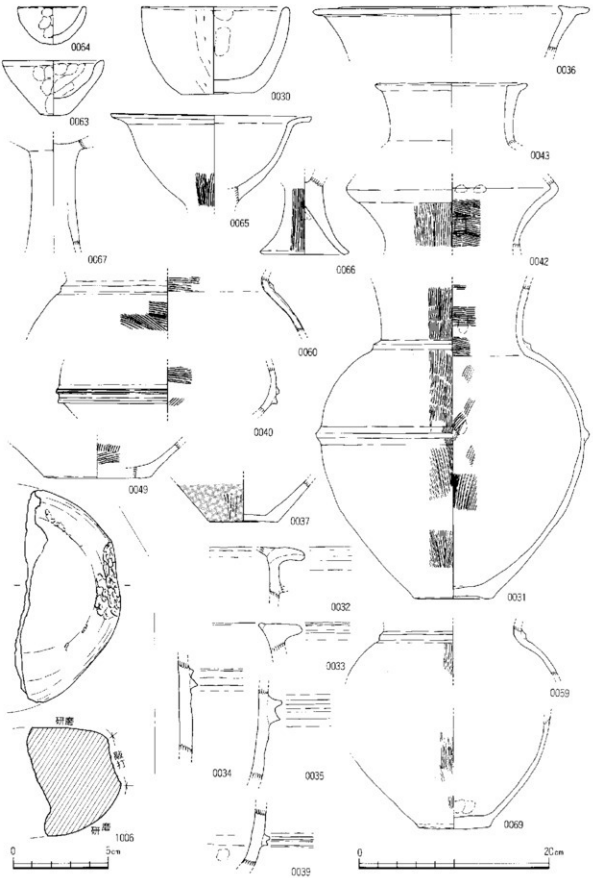


Fig. 19　第7号井戸出土遺物実測図

で廃棄されたものと考えられる。

出土遺物（Fig.18・19, Ph.10）：本井戸からは、比較的まとまった遺物がコンテナ2箱出土した。0027～0029・0032～0035・0038・0039・0041・0044～0048・0050～0058・0061・0062・0068は甕形土器で、0029などのくの字状の口縁をもつもの、0041などの逆L字状口縁をもつもの、0032などの大形のものに大別できる。0027の口縁外面はヨコナデ、胴外面はハケ目調整が施され、口縁内面はハケ目調整後ナデを加え、胴内面も指押さえ痕は残るがナデ調整で仕上げられている。口径15.7cm。0029の口径は16.5cm。0054は口縁端がやや垂れ気味で、口縁はヨコナデ調整、胴内外面はハケ目調整が施されている。口径15.6cm。0055は頸に三角貼り付け凸帯を巡らし、口径24.6cm。0028は平底で胴外面はハケ目調整、胴内面は指押さえ後ハケ目調整が施されている。底径9cm。0056は平底で底径5.5cm。0061・0062の口径は14cm、21cmで、0052・0057の底径は7cm、6.8cm。0041は口縁端に刻目を施し、口縁直下にM字凸帯を巡らし、口径30.4cm。0053の口径は26cm。他の甕の底部は平底で、底径は0046が8cm、0045が11cmを測る。0030・0063・0064は鉢で、0030は上げ底気味の平底で、外面はヘラナデ、内面は指押さえ後ナデ調整が施され、口径15.7cm、器高9.2cm、底径7.8cm。0063・0064は手捏ね整形で坏状をなし、0063は口径10.7cm、器高5.8cmで、丸みをもった径3.1cmの半底をもち、0064は尖り底で、口径7.2cm、器高4cmを測る。0065～0067は高坏で、0065は口径21.2cm、坏部高9cm前後を測り、器面は荒れている。0066は脚で、外面はハケ目調整が施され底径9.4cmを測る。0031・0036・0037・0040・0042・0043・0049・0059・0060・0069は壺で、0036は鍵状口縁をもつ広口壺で、口径29cm。0043は胴から垂直に立ち上がり平坦口縁をもち口径16cmを測り、0042は複合口縁壺。0031・0059・0060は、頸と胴の境と胴最大径に三角貼り付け凸帯を巡らしている。0031・0037・0049・0069の底径は8.4cm、7cm、11.2cm、7.5cmを測る。1006は花崗岩製の敲石で、縁辺の一部に敲打痕がみられる。

以上から本井戸は硬砂層の湧水を利用した弥生時代後期中頃のもので、鳥栖ロームと八女粘土境界の崩落が少ないことから、比較的短期間使用し廃棄されたものといえよう。なお、本井戸からは中期後半の土器が一定量出土しているがこれは同時期の土壙（SK－18）を切っているためと考えられる。

4．その他の遺構と出土遺物

1）第6号土壙（SK－06）（Fig.3・20, Ph.11）

本土壙は調査区の東南コーナーで検出し、約1／4について調査を行なったが、大半は調査区外へ延びている。大きく削平を受けているが、平面形円形で、検出面径1.4m前後、底面径1.7m前後を測

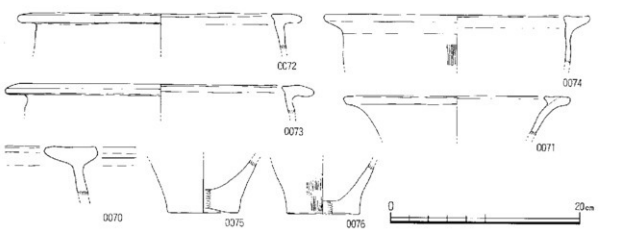


Fig.20　第6号土壙出土土器実測図

り、46cm遺存している。底面は中央部がやや深く皿状をなし、壁は内傾しながら立ち上がりフラスコ状をなすと考えられ、黒色～黒褐色粘質土を覆土としている。

出土遺物（Fig.20, Ph.11）：0071が壺、他は甕である。0070はT字状口縁をもつ大形甕で、0072～0074は逆L字状の口縁をなす。0073は丹塗りの痕跡があり、器面は剥離して荒れている。0072～0074の口径は29.6cm、32cm、28cm。0071は、口径24cmの鋤状口縁をもつ広口壺。0075・0076はやや上げ底気味で、底径7.2cm、9.6cmを測る。

以上から、本土壙は平面形円形フラスコ状をなす土壙で貯蔵穴と考えられ、出土土器から弥生時代中期後半のものか。

2）その他の土壙と出土遺物（Fig.3・21, Ph.12）

本調査地では、調査区東側で第5号土壙（SK－05）、調査区の西南部で第17・18号土壙（SK－17

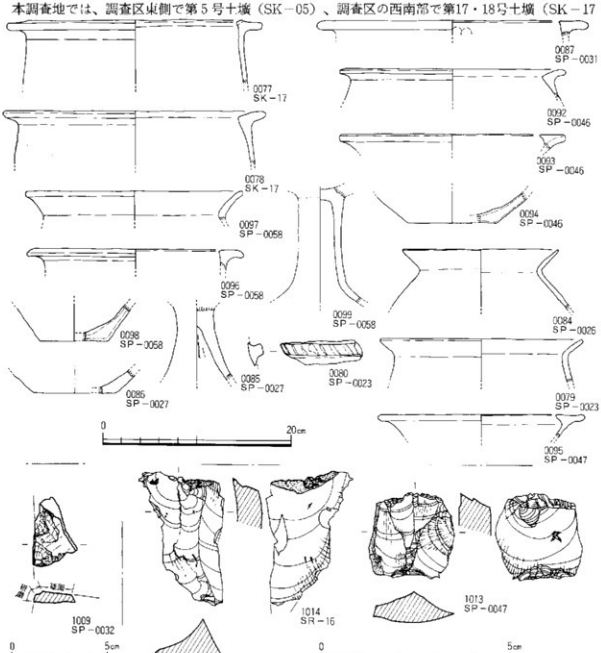
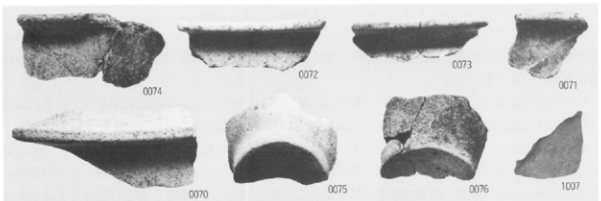


Fig. 21　各遺構出土遺物実測図



Ph. 11　第６号土壙出土遺物

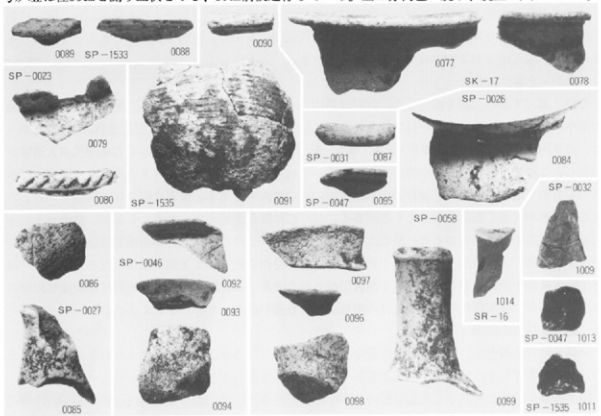
・18）を検出した。第５号土壙は平面形隅丸方形で、東西方向1．５ｍ、南北70㎝を確認したが東側は調査区外に延びている。20㎝強遺存しているが、出土遺物は少量の弥生土器細片があるのみで、時期限定はできない。第17号土壙は長軸1．２ｍ、短軸80㎝前後の平面形隅丸方形を呈し、74㎝遺存している。第18号土壙は第７号井戸に切られ、削平を受け不定形である。

第17号土壙出土遺物（Fig. 21）：0077・0078は逆Ｌ字状口縁をもつ甕で、口径27㎝、27.6㎝を測り、器面は剥離し荒れている。

以上から、第17号土壙は竪穴住居址付設の貯蔵穴か。出土遺物から弥生時代中期後半のものといえよう。

３）その他の遺構と出土遺物（Fig.3・21，Ph.12）

本調査地では、調査区北部で第16号炉址（SR－16）、調査区の西側で柱穴60基を検出した。第16号炉址は径50㎝を測り皿状をなし、10㎝前後遺存している。壁は赤褐色に焼け、焼土が入っている。



Ph. 12　各遺構出土遺物

本炉址からは、黒曜石製剥片１点（1014）が出土したのみである。

本調査地検出の柱穴は、径60cm前後で平面形隅丸方形の掘り方をもつものが多く、径20cm前後の柱痕跡がみられることから掘立柱建物の柱穴と考えられる。各柱穴からは少量の土器片等が出土したが、図化できたのはわずかである。

0079・0080は第23号柱穴出土の甕で、前者は口径21.6cmを測り、くの字状口縁をもっている。0084は第26号柱穴出土の土師器甕で、口径16.6cmを測る。0085・0086は第27号柱穴出土で、前者は高坏、後者は甕の底部か。0087は第31号柱穴出土の逆Ｌ字状口縁をもつ甕で、口径28.8cmを測る。1009は第32号柱穴出土の砂岩製の砥石片。0092～0094は第46号柱穴出土で0092は逆Ｌ字状口縁をもつ口径24cmの甕。0093・0094は壺で、前者は鋤状口縁をもつ広口壺で口径24cmを測り、後者は底径9.4cmの底部である。0095・1013は第47号柱穴出土で、前者は鋤状口縁をもつ広口壺で口径22cmを測る。後者は良質の黒曜石製剥片を素材とし剥片端部に二次加工を加え剥片石器としている。0096～0099は第58号柱穴出土で、0099は高坏、他は甕である。0097はくの字状口縁。0096は逆Ｌ字状口縁をもち口径23cmを測る。0098は底径7.2cm。

以上、各柱穴出土の遺物は弥生時代中期後半から古墳時代初期のものであり、必ずしも各柱穴の年代を示しているといえないが、各柱穴は弥生時代後期から古墳時代初期のものといえよう。

Ⅲ　おわりに

本調査地は、井尻Ｂ遺跡の北東部の標高12.6m前後に位置し、調査は建物建設予定地の390㎡について実施した。調査区の約240㎡が大きく削平を受けていたにもかかわらず、以下の成果を得ることができた。

１．竪穴住居址の検出

11基の平面形方形の竪穴住居址と、竪穴住居址内の炉と考えられる炉址１基を検出した。竪穴住居址は、出土土器から弥生時代後期後半から古墳時代初頭のもので、住居中央に炉をもち、２本の柱を主柱とし、削り出しおよび貼りベットをもっている。

２．井戸・土壙の検出

井戸１基、４基の土壙を検出した。井戸は鳥栖ローム・八女粘土を掘り抜き、含水層である硬砂層の湧水を使用している。本井戸は鳥栖ローム・八女粘土境界の崩落が少なく、祭祀遺物は出土しなかった。御笠川・那珂川間には、博多・比恵・那珂・板付・諸岡遺跡など弥生時代から古墳時代の大遺跡が所在し、これまで多くの井戸が検出されている。これらの井戸は、鳥栖ロームと八女粘土境界の湧水利用のもの（雨水も利用）、硬砂層の湧水使用のものに大別できる。後者の場合は、鳥栖ロームと八女粘土境界が大きく崩落しているものが多く、井戸底に祭祀土器がみられる。しかし、鳥栖ロームと八女粘土境界の崩落がないものは祭祀土器がみられない。このことは井戸が短期間の使用であることを示すと同時に、井戸底出土の祭祀土器は、井戸廃棄時の祭祀といえるのではないだろうか。井戸は弥生時代後期中頃、土壙は弥生時代中期後半のものと考えられ、竪穴住居址は同時代後期後半以降のものであるが、弥生時代中期後半には本地周辺には集落が広がっていたといえよう。

３．掘立柱建物の検出

64基の柱穴を検出し、大半は掘立柱建物の柱穴と考えられるが、建物としてまとめることができたのは１棟のみである。柱穴出土遺物から弥生時代後期後半から古墳時代前期のものといえよう。

以上のほか、出土遺物として翡翠製の勾玉が特記できる。形態的には弥生時代前期から同時代中期前半のものと考えられ、伝世したものか。

井尻B遺跡3
——第4次調査報告——
福岡市埋蔵文化財調査報告書　第412集
1995年（平成7年）3月31日
発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号
印　刷　金丸印刷株式会社